

診療所における在宅診療の実践（最終回）



在宅診療の展望

松尾クリニック院長 松尾美由起

2～3年前から患者さん及び医療者双方が在宅診療に興味を持つようになってきた。前号までに述べてきたように、在宅での医療の限界というものは必ずあり、その理解があって初めて実施できるものと考えられる。ゴールドプランにしても、実際に地区住民を支えるまでになるには、まだ多くのときを経なければならぬだろう。そんな中で、これからの在宅診療をどのように発展させていくべきだろうか。

1) スムーズに在宅診療ができる環境

まず第一に、誰もが納得のいく在宅医療を受けるための環境を整えることが重要と考えられる。最近いろんな所で在宅診療や訪問看護について話す機会があったが、その中で一番多い質問・疑問は「何をどのようにして始めたいのか」、「一診療所でどれくらいカバーできるか」、「時間がないのではないか」であった。

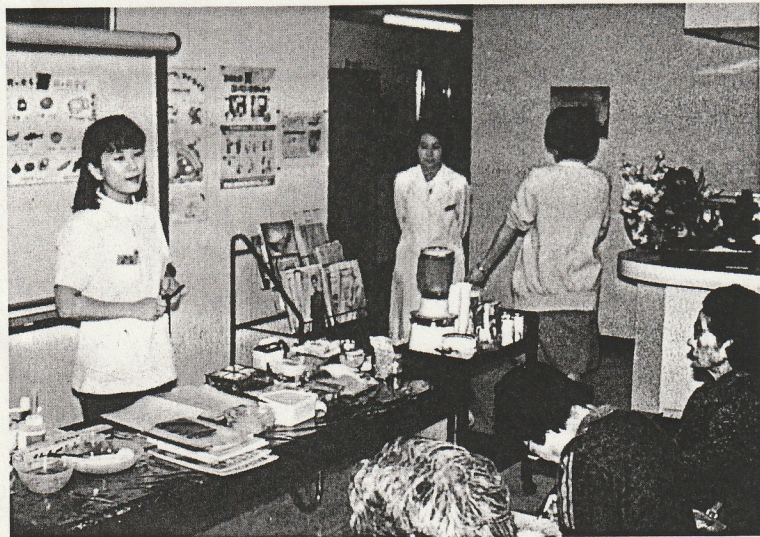
最初の疑問に関しては、「案ずるより産むが易し」である。形態が整うまで待って実行するという気持ちでは、なかなか始められない。いいと思われることはすべて着手し

てみると、独自の工夫が生まれてそれなりにうまくいくものである。

それよりも、気にかけるべきことは、一診療所の守備範囲は限られたものであるので、決して単独では十分な医療は提供できないということである。横のつながりとして診療所同士がより具体的に協力できれば、在宅の患者さんを複数の医師で診ることも不可能ではないと思われる。

在宅診療を行うに際して多くの開業医師の案ずるところは、プライベートの時間がなくなること、体力に自信がないこと、そして困難な状況に陥った時、非常に孤独であると同時に不安であることではないだろうか。そんな時に複数の医師で患者を担当できればどんなに重圧感が軽減されるだろう。

また、以前にも触れたと思うが、後送病院との連携が重要になる。私自身、「在宅診療がうまくできる因子として何が考えられるか」と尋ねられた時は、病院との関係があげることが多い。しかし、まだまだ病院は閉鎖的である。患者の継続診療のためだと自分に言いかけ、奮起して病



介護者向けの流動食教室（松樹会）



患者向けの食事勉強会（松樹会）

患者会活動の成果（医療側から）

- 1) 患者さんが生き生きと積極的になった。
- 2) 意見もはっきりと言えるようになり、意思疎通がよくなった。
- 3) 皆でいろんなものを作り上げていくとき地域の中での連帯が出来てきたように思われる。

患者会活動の成果（患者さんの言）

- 1) 今まで病気のことが不安でどこにも行けなかったが、自信が付き出かけられるようになった。
- 2) 定期的に練習に行こうと思うと生活にハリが出てきた。
- 3) ニュースなどで自分の意見や文章が発表でき楽しみである。

今後の課題

- 1) 他科との連携医療
- 2) 在宅での介護指導・リハビリテーション
- 3) デイケア施設
- 4) 緊急通報の充実
- 5) 各医療機関・施設機関の連携
- 6) ボランティア活動の育成
- 7) 介護者同士の連携



松樹会でつくっている劇団「松ぼっくり」の練習風景



松樹会の集い

院の門をくぐることもある。開業医が努力しなければ受け入れてくれない体制であるが、近い将来には、もっとオープン化され、誰もが患者のために気軽にディスカッションできるような地域の基幹病院ができることを期待している。

2) 社会資源・民間資源の活用

単独の医療機関では、時間的に十分な訪問看護を提供できない症例もある。特に高齢者世帯で、介護者が短期間でも寝込んだ時の食事や患者介護の問題、トイレの介助などは、とても一医療機関の訪問看護だけでこなせるものではない。いわゆる訪問看護センターやヘルパー、そして民間の開業看護婦たちと連携できれば、もっと在宅患者が快適に過ごせるかもしれない。

しかし、民間のサービスを活用しようとしたとき、経済的に成立しないことが多い状況であり、公的な経済援助が切望される。また、民間でのデイケアセンターを増やしていければ、日常生活動作の改善も望めることは多い。そのためにも、やはり公的な援助が求められる。

さらに、夜間のケアの問題があげられる。夕刻より朝までの時間は、さまざまなサービスの狭間となってしまっているからだ。だから、ある民間の開業看護婦が夜間に定期的に在宅患者の排泄介助に回っていることを知った時は、一種の感動を覚えざるを得なかった。

介護は24時間であり、家族介護のみでは介護者の疲労は大きくなるばかりである。デイケアだけでなく、ナイトケアも大きな課題ではないだろうか。医療機関と民間が役割分担しながらケアできる体制を作っていければと思っている。



「花博」への日帰り旅行（松樹会）



松樹会で開いている書道教室

3) 患者家族との一体感

常に疲れと不安の中で介護にあたっている家族にとって、「同じように頑張っている仲間がいる」というだけで励みになることがある。また、在宅ケアを支援するさまざまなサービスがあるという情報を提供し、介護要員は家族だけではないということを伝える必要がある（現在これらのサービスについては、知る人ぞ知るとい状態であることが多い）。

当院が患者の会（患者及びその家族で構成されている）をつくって7年目の総会で感じたのだが、同じ悩みを話し合ったり、瞬時でも時を忘れて何かに没頭することにより、彼らには明らかに活力が出てくるようである。ほかに、車いすでの外出も医療スタッフが同行すれば安心して行うこ

とができるし、時にはストレス発散のために介護家族の集いの場があってもよい。

何と云っても、親を看ることができるのは人間だけである。患者の家族同士、そして医療関係者とが、一体感をもって在宅患者に臨めば、もっと精神的にも安定が得られるかもしれない。入浴の問題、移動の問題など、在宅ケアにかかわる課題は多い。福祉関係者、ボランティアを含めた住民同士が「快適な在宅ケア」が受けられるようにサポートできれば、高齢社会も少しは明るいものになるであろう。

要は、介護の問題は、誰かひとりが背負うものではなく、地域の皆で考えていかねばならないということである。医療従事者として、患者さんの“そば”にいる医療を心掛けたいと思う。